

学びを見つめ直す子どもの育成を目指す社会科授業づくり —特色ある地域「竹原市」のまちづくりの実践を通して—

深渡瀬 聖子

1 はじめに

令和7年度は、「問い続け、価値を創造する子どもを育てる」と新テーマを掲げて学校研究がスタートした。それを受けて、社会科部では、学びを見つめ直し更新し続けられる授業づくりを目指した。自身の実践を振り返った際、これまで、社会的事象に対して、他者と関わりながら課題を追究・解決しようとしたり、その解決に向けて協働的に学んだりしながら社会との関わり方を自分なりに考え、意思決定する学びを目指してきた。しかし、自らの考えや行動が、なぜ、どのように変わったかを自覚することまでは十分に意識できていなかった。そこで、学びのプロセスを振り返り、考えの変容や判断した理由に気付き、更新した自分を自覚し次の学びへつなぐことのできる社会科授業づくりが必要だと考え、実践した。

2 具体的な取り組みについて

本実践において、以下の取り組みを行った。

(1)対象選びの工夫～地域教材の活用～

子どもが何もわからない社会的事象について学ぶだけでは、学びを見つめ直すことにつながらず、新しいことを学んだ段階にとどまってしまう。あえて、児童があまり知らない題材を取り上げ、わかったつもりであってまだ見えていない部分があること等を学習し、学びを見つめ直すことで、これまで知っていたことをくつがえすことができる考えた。

(2)学習展開の工夫

①考えを可視化できるようにするために

本研究では、課題に対する考えや、考えの変容の理由がわかるようにするため、OPP (One Page Portfolio) シートを活用した。学びの過程を見て、自分がどのように考えた結果、意見や理由等が変わったのかを振り返ることが「学びを見つめ直す」ことにつながると考え取り組んだ。

②学習問題に対する考えの度合いを明確にするために

本実践では、OPP シートに学習問題に対する自分の立ち位置を明確にできる欄を設

学習問題
に対する
自分の考
えの度合
いを可視
化できる
よう、%で
示すよう
にした。

第二次 OPP シート

[illegible]

③単元の展開の工夫

第一次	社会的事象について知る。	知らなかったことを知る。
第二次	第一次の学びを生かし、社会的事象について新たな視点から考え、自身の学びを見つめ直す。	ある程度知っていることに対して、「わかったつもり」にならず、学びを更新し続ける。
第三次	第一次、二次の学習内容をふまえ、未来の自分・社会の在り方について考える。	これまでの学びを用いて、これからについて考える。

(1)本単元における教材「竹原市」

本単元で取り上げた竹原市には、歴史ある町並み（町並み保存地区）やうさぎや毒ガス資料館などのある大久野島などの魅力があり、それらを活用した観光産業にも力を入れている。市役所の建て替えや大型スーパーの撤退など町の中心部が移り変わろうとしている中、令和5年度には、市民に、竹原市中心部の町づくりのアンケートを

実施しており、市民の声を町づくりに生かそうとする取り組みも見られた。観光産業においては、ここ数年は増加傾向にあり、市としても観光産業に力を入れたいと考えている。大久野島は、うさぎへのえさやりが可能な場所であり、うさぎとの触れ合いを求めてくる観光客の数も多い。観光客増加を狙う一方で、それに伴い出てくる課題（環境面・生態系への影響）にも直面している。それらの課題に対して、町づくりのために市役所だけではなく、ボランティアや地域住民、環境省や施設で働く人など複数の団体により観光産業を担っている現状がある。観光産業を推進したい一方で課題もある。以上のような状況を踏まえると、それらの解決しがたい問題について、問い続け、学びを更新していくとともに、地域社会の一員として、これからの持続可能な町づくりについて考えることでテーマに迫っていくことができると考えた。

(2)単元の目標ならびに単元計画

本単元の目標

- 竹原市は、人々が協力し、特色あるまちづくりや観光などの産業の発展に努めていることを理解している。また、地図や資料などで調べ、まとめている。【知識及び技能】
- 竹原市の位置や自然環境、歴史的背景や人々の協力関係などに着目して、竹原市の様子を捉え、特色を考えている。【思考力・判断力・表現力等】
- これからの竹原市について、主体的に問題解決しようとしたり、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。【主体的に学習に取り組む態度】

単元計画 全9時間

- 第1次 竹原市の町づくりについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
竹原市について（竹原市と出合う・位置、交通、自然環境）
竹原市の町づくりについて（町並み保存地区 大久野島）
歴史や自然環境を生かすまちづくりのための人々の協力関係
- 第2次 これからの町づくり「大久野島は観光に力を入れるべきか」・・・・・・・・・・3(本時 2/3)
- 第3次 竹原市の課題や魅力から持続可能な町づくりを考える・・・・・・・・・・2

4 検証授業における子どもの見取り

(1)単元の流れ

竹原市の観光客増加のデータを元に、低迷していた観光客や観光客の消費額が上がり始めた理由を問い、学習課題Ⅰ「竹原市は魅力ある町だといえるか？」を設定した。第一次は、「知る・わかる」段階として、竹原市の位置や自然環境、人々の活動や産業など、竹原市はどのような特色があるのかを追究した。ここでは、学習問題に対して場所ごとに魅力度について立ち位置を明確にして学習を展開した。第二次では、子どもたちの中でも認知度の高かった、大久野島を題材にし、学習問題Ⅱ「大久野島は観光に力を入れるべきか？」と設定した。その中で、うさぎが大久野島の魅力の一つであることから、観光に与える影響や持続可能な観光になるにはどうすればよいか、第一次でとらえ竹原市の特色をもとに意見を形成できるようにした。新たな視点として、観光産業を推す竹原市の考えとそれに対する課題に目を向けさせることで、学習問題

に対する切実生を増すことができるようにするとともに、課題に対して自分の立ち位置を記し根拠を表現し、考えの可視化を図った。また、類似した立場の者同士の学習環境とし、議論しやすい場を設定した。第三次では、第一次での児童の意見「少子高齢化」、「交通問題」を課題に挙げ、持続可能な町づくりに向けた学習問題を設定し、未来につながるまちづくりについて考えた。単元導入時の児童の反応や授業での発言から単元を構成することで、より主体的に、そして社会的事象に対してより自分事として捉え、学び続けようとする姿へとつながることをねらった。

(2)本時の目標

竹原市の町づくりについて、市民や観光客、自然動物愛護の視点等に立ち、考えを形成することができる。【思考・判断・表現】

(3)本時の学習展開

学習活動	指導の意図と手立て	評価の観点
1. 前時までの学習を振り返り、単元の学習問題を確かめる。 2. 具体的な事例を基に、本時の課題について自分の考えを形成し、議論する。	・竹原市の特色について振り返り、本時の視点を明確にする。 ・大久野島の観光客の推移を提示し、観光客の増加に伴い消費額も増え、財政も潤うことをおさえることで本時の課題へとつなげる。	・資料をもとに、大久野島の現状（良い点、課題点）について考えている。（発言）
うさぎを観光のために推していくことはよいか		
○大久野島における、観光客の推移と消費額について ○うさぎをPRしているHP 3. 自分の考えをもち、交流する。	・数年前とは変化している児童の発言を活用し、うさぎに対する変化から、餌やりについて考えられるようにする。 ・現在も餌のやり残しがあることやうさぎへと関わっている画像を提示し、課題に対して考えを形成できるようにする。 ・考えの理由を大切にし、市民、観光客・動物、財政等、双方の考えを構造的な板書で整理する。	・大久野島の町づくりについて多面的に考えている。（ノート）
4. 交流し、再構築する。	・ゆらいでいる場合は、課題に対して自身が向き合っていると認め、ゆらぐ思いや理由も表現できるようにする。	・自分の考えが変わった理由やさらに重要だと考えたこと、これから考えたい視点も取り入れて考えている。（発言・OPPシート）
5 まとめ・リフレクション	・ペアで振り返りを行うことで、友達の発言による考えの変容などがあったことを自覚できるようにする。	

5 本実践の見取り

授業前半は、大久野島の魅力について深掘したことを想起した。観光客数や観光消費額の変化からこれからどのようにまちづくりを行っていくか考える中、子どもたちの認知度の高かった「うさぎ」に焦点を絞り「うさぎを観光として推していくことはよいか。」と課題へつなげた。話し合いの場では、賛成度の高い方から意見を聞いた。

- T 『大久野島のうさぎを観光として推していくことはいいかな?』
- C1 大久野島にしかなくてかわいくて外国人の子どもも喜ぶと思う。
- C2 前の授業で大久野島の観光客が少し下がってきているから、観光で推していくことは大切だと思う。
- C3 観光客数と外国人観光客数が少し減っている。感染症などの予防をすればいい。
- T 触れ合うことは、誰にとっていいかな?
- C3 観光客やわたしたち
- C4 うさぎにとっては、ストレスになるかも。
- C5 70%くらい賛成。うさぎをもうちょっと集めたりして、「かわいんですよ」とアピール。そうすれば消費額が上がる。でもうさぎにとってはストレスがかかるのでは。本当は今でも触っちゃいけないんだけど、夏休みとかはいろんな人が触っている。
- T 外国の方にとってもいいけど、観光客が増えたら消費額が増える。これは、誰にとって良い?
- C6 大久野島。竹原市。
- C7 うさぎをお勧めすると、外国人の人にもけられるし、大久野島の文化、うさぎのことばかり気になっちゃう。他の物(自然・歴史)も注目をしてもらいたい。
- C8 毒ガス資料館もある C7さんと同じで、国立公園だし、うさぎが増えすぎるとうさぎがメインになる。うさぎだけが久野島じゃない。他の毒ガスや公園が目立たなくなる。
- C9 今でもうさぎを求めて来る人もいるから、うさぎをおしたら子どもにとってよい。行きたいという人は多いと思う。でも、それだけだったら…うさぎも推しすぎると大変・力尽きてしまう
- T 忠海港や竹原市のHP、観光協会のHPを確認(港 桟橋 船内などの画像)
- C10 竹原市は推している
- C11 うさぎを推すと観光客が増えて消費額が上がり、市がうるおう。そうすると商品をつくったりサービスが上がるし環境もよくなる。けれど、人が来なくてお金もなくサービスもできない。上がるか下がるか不安定の中で商品などを作った時もし売れなかったりしたらさらにお金が無くなる。安定している毒ガスとか自然ならそれをメインにすると、学校では平和学習や戦争について学習することがある。今が限界ならこれ以上増やしたらよくない。
- T 竹原市役所の人の考えを聞いてみよう。(竹原市の、推していきたいという考えを確認)
- C12 PRはしていいんだけど、うさぎをもっと大切に。うさぎをもっと守った方がいい。
- C15 %は変わっていないけど、毒ガスも大切にしていけばいいんじゃないか。
- C13 他にも毒ガスや虫や花がある。
- T 今の話し合いで%が変わる人移動してみて(移動した児童4名)
- T 移動した先でどんなふうに考えが変わったか話し合おう
- C14 PRのしすぎはだめだけど…。触ったらうさぎに悪影響だけど、触らなくても餌をあげて楽しめる。
- C15 %は変わっていないけど、毒ガスも大切にしていけばいいんじゃないか
- C16 観光客が増えるのはいいけど、外国の人が増えるとゴミが増えてうさぎにもストレスだし自然破壊にもなる。
- C17 でも、外国人だって日本の文化を味わいたいし、竹原市のウサギを楽しみにしている 別に外国人の人数を減らすのではなくて増やそうとする方向がよいと思う。
- C18 うさぎが疲れてその後うさぎが観光客これ以上ウサギをおしちゃうとしんどくなる。また、過去のニュースのような出来事もあるかも
- T 外国の人へ人気と言ったね。国立公館をあげられる大久野島はすごく珍しい。
- C19 これからの町を考えると、平和について考える場所を続けること 植物を育てることが大切。あまりうさぎに力を入れることはうさぎにとってもよくない。うさぎも自然も歴史もバランスのとれたようにする。

C1~3は、最初は100%に近い意見だった児童である。様々な価値と出合うことで、「PRのしすぎは良くない(C14)」と話し合いでつぶやいていた。他の児童も、大久野島の自然や毒ガス資料館などの歴史や平和を考えられる場所も活用して推していくことについて考えを広げていた。また、C15のように、%は変わらないが、判断の理由が広がっていた。さらに、C19のように、%は低いままでさらに下がったが、それ

また、本実践において、単元の終わり子どもの学びの広がりを見つめ直した。町並み保存地区や大久野島といった第一次での学びだけではなく、竹原市の観光産業に対する取り組みや人々の協力、大久野島における諸問題に対する自分の考えた軌跡も見つめ直す子どもの姿も見られた。また、友だちの選択の理由を聞いて納得し考えが変容する児童や、優先順位や優先度が変容する児童どの視点も重要だからこそ難しい、バランスの難しさを感じたり悩んだりする



学習前→学習後の広がり

うさぎ・かんきょう・人間。この関係、バランスが難しい。うさぎと人間どちらかを優先したらどちらかに不満(悲しさ)が残る。でも中とはんぱはよくない。友達が、「指定する」(時間・場所)という意見が出た時、これはウサギ寄りだと思った。うさぎ寄りに考えると、人間が……。でも餌をあげることやうさぎとの交流をなしにしては、観光のバランスが…。人間も、そこは、少しはがまんしてもいいのではないか。だから、ウサギ寄りに考えることも賛成だ。

新しい研究テーマのもと、問いが生まれる地域教材を探究し、簡単には答えが出ないような問題や答えが複数あるような問題の教材化を目指してきた。授業を通して、自分たちの住む町に愛着をもち、これからのよりよい社会を創る一人の形成者となることを期待して日々実践してきた。しかし、切実な学習問題の設定やそれに向かう意見交流の仕方の工夫や教師のファシリテートの未熟さなど、課題が山積みである。今後も、より一層授業改善に努める。

（文責 深渡瀬 聖子）

- ・角田将士（2020）『多様化時代の社会科授業デザイン』第7章「社会に開かれた社会科授業」の実践的課題と授業デザイン 晃洋書房
- ・溝上慎一（2020）『社会に生きる個性 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』東信堂